

樋口芳麻呂氏藏 『和歌一字抄』 翻刻 (三)

日比野 浩 信

(前号の続き)

滋 野望草滋 同

武蔵野のあしのおきふを分行は末はよりこそ空はみえけれ

野原露滋 関白

いかばかりをきあまりてか夏草のしけみのをに露のこほる、

野花露滋 顕季

鶉なくあさのおほ野のまくす原いく夜の露にむすほ、るらん

薄當路野滋 西行

花す、き心あてにそ分てゆくほのみし路の跡もなければ

遠草漸滋 無名

陰ふかく成もゆくかなき、すなくかたの、みの、荻の焼原

重 草花露重 俊頼 (四〇才)

四三 秋萩も露のしからみかけつれはいくしほにかを染かけつらん

帯 梅花帯雪打聞 藤原敦叙 民部大輔

四三 白雪のきえぬかきりは梅花かはかりをこそしるへなりけれ

瞿麥帯露 俊頼

四四 あさ露のおきゐに庭のとこにしきたか敷嶋のやまと撫子

野草帯露 金 贈左大臣

四五 まくす原あたのおほ野の白露を吹な払そ秋の初風

野花帯露 肥後

四六 白露と人はいへとも野へみればをく花ことに色そかはれる

秋花帯露開 元輔

四七 ほころひて花さきにけり藤はかま匂にむすふ露にまかせて」(四〇ウ)

残菊帯露 俊頼

四八 初霜のをきのこしたる白菊を露やぬすみてうつろはすらん

映 花色映月 平經章

四九 山桜枝にとまれる月かけを花のひかりとおもひける哉

月光映露 賀茂成助

五〇 小篠原露にうつれる月影を吹うこかすなよはの秋風

月光映水 俊頼

五三 池水にかよひてかけのすみぬれは氷を月のつまとみる哉

菊花映霜

同

四三 八重をける霜の下なる白菊の葉をさへ花と思ひけるかな

寫 花寫池水 顯季（四一才）

四二 白浪のたつかとそみる池水にしつえをひて、さける桜は（三）

花影寫水 康資王母

四一 しからみをかけてと、めむ花のかけうつれる水は外にちらさし

同 良 資仲

四〇 水にうつる影のなかる、物ならば末くむ人も花はみてまし

秋花寫水 經衡

三九 はな薄みきはにまねく影をみてうへこそ波は立よりにけれ

樹陰寫水 関白

三八 松風を汀の波にうつしてもてうこかぬ枝をうこくとそみる

山影寫水 顯季

三七 かめ山のかけをうつして大井河いく代までにか年のへぬらん（四ウ）

浮 燭影浮水（七月七日 兼澄 詠之）

四六 ともしひのうかへる池のそこ清み七夕つめのゆき、をそみる

松影浮水 經信卿

四四 ちとせふるかけをそみる池水の波おりかへる松のしつえに

春花浮水 國基

〇三 緑なる河邊の柳かけさせは水にも春の色そ見えける

落花浮水 雅兼

〇三 花さそふあらしや嶺をわたるらん桜なみよる谷川の水

萩花浮水 匡房

〇三 岸ちかみ茎しかのしからみかくればやうきてなかれぬ萩萩の花

菊花浮水 範永〔四二オ〕

〇三 ささぬれば菊は水にもうつりけり栽けん人は跡たにもなし

紅葉浮水 經信卿

〇三 嵐ふく山のあなたの紅葉をとなせの瀧なになかおとししてそみる

同 經則大炊允

〇三 なかれくる紅葉の色のふかけれはあさき瀬もなし白河の水

落葉浮水 俊頼

〇三 みとせまで人もすさめぬ錦木とみしは網代の木のは也けり

同 資宗朝臣

〇三 笈士新古よまでこと、はん水上はいかはかり吹山のあらしそ

開 秋草夏開 經衡

〇三 萩萩は夏の野へにそ咲にけるなけてや鹿のしかマコらこにせんこ〔四二ウ〕

秋花開露 為義

〇三 白露はおなし心にをくらめと色くみゆる秋ののへかな

落 梅花落水 俊頼

散 つもる花こそ岩によとむとも香はなかれてや瀬にかほるらん

花 落 晚 風 匡房

夕暮のはなをつゝめる春風は袂さひしき物にそ有ける

葉 落 月 明 國房

月みるそうれしかりけるわか宿のそとも木陰ときはならねは

花 落 枝 緑 良暹法師

梢には葉のみしけりて桜花庭のおもこそさかりなりけり

未 落 山 花 未 落 經信卿(三才)

うらみしな山のはかけの山桜遅くさけともをそくちりけり

同 師賢

盛とてみる空かひイもなし色かへぬときはの山の花にしあらねは

鮮 秋 花 露 置 鮮 兼澄

色色くくにうすくもこくもをきはたる露と花との中そ床しき

散 落 花 散 衣 藤永実家定イ

散かゝるけしきは雪の心ちして花には袖のぬれぬなりけり

靡 萩 花 靡 風 俊頼

をく露にしほるゝたにも有物をたつけイなる萩に秋風そふく

隨 柳 絲 隨 風 白河院御製

風吹は柳の糸のかたよりになひくにつけて過るはるかな」(四三ウ)

柳隨池水 行宗卿

春風になみよる池の汀には影さたまらぬ峯の青柳

花香隨風 源時綱

いつかたの花の匂ひとしらぬかな吹くる風の定なければ

隨風尋花 藤定頼中納言

吹風をいとひもはてし散のころ花のしるへにけふはなりけり

落花隨風 橘元經散位

散しくと嶺こす風のさそはすは山のあなたの花をみましや

野花隨風 俊頼

かくはかりはけしき野への秋風におれしとすまふ女郎花哉

菊匂隨風 周防内侍(四才)

霧こめてまかきの菊はみえね共風に匂のほとそしらる、

落葉隨風 俊頼

木枯のはけしきうれにおりく／＼てけふしもろき紅葉をそみる

草隨地深 仲正

草も皆たかきみしかきよなりけりあうち萩原所せきして

飛 花飛如雪打聞 藤有綱

しら雪にみえまかひつ、散花のきえぬ斗そしるしなりける

乱 瀧水乱絲 大中臣輔弘

⑤ みたれおつるいと、こそみれ瀧津せはわくく 水のくれば成けり

(6) 同 永源

⑧ きよ水のこほりをわくる瀧のいとはいと、よるこそむすほ、れけれ

薫 梅花夜薫金 長房

⑥ 梅かえに風や吹らんはるのよはおらぬ袖さへ匂ひぬる哉」(四ウ)

花薫風金 関白

③ よしの山嶺の桜やさきぬらん麓のさとにほふ春風

盧橋薫風 顕季

④ 夕つくよ花橋にふく風をたかふる袖とおもひけるかな

野花薫風 永源

⑤ いもきくや野へに秋風吹ぬらん花ににほはぬ人のなきかな

落花薫衣良 行宗家イ

⑥ 散かゝる花の袂ににほふかな春はすくとも衣かへせし

野花薫風袖イ 顕季

⑦ みれとあかぬとをちの小野の萩か花空袖イにうつれる香さへなつかし

残菊薫衣 俊頼」(四オ)

⑧ うつろへは色もイをは霜のへたつれと香は我袖の物にそ有ける

菊花薫袖 堀河右大臣

〇六 さいくのはなおるうつりかにこよひしも袖に心を人やをくらん

残花薫風

雅定

〇六 ちりはてぬはなのありかをしらすれはいとひし風そけふはうれしき

芳馥(マツ) 梅花夜芳後

顕綱朝臣

〇六 梅花かはかり匂ふ春のよのやみは風こそうれしかりけり

菊花久醜

三條大納言

〇六 色もかも久しうほへうつろはてやへかさなれるしら菊の花

匂 岸菊久匂

堀河右大臣

〇三 遠近のきしにかれせぬ菊の花いくよの秋にあはんとすらん」(四五ウ)

同

藤義忠 大和守

〇三 なかれゆく末の世までもつきもせすさして匂へる峯の白菊

緑 花落枝緑

良暹

〇三 梢には葉のみしけりて桜花庭のおもこそ盛なりけれ

庭松久緑

三條大納言

〇三 ときはなる松かさおほふ庭の面はちと世のかけそさしてみえける

岸松久緑

實行卿

〇三 池水のきしのいはねにねをとめておひそふ松のいくよへぬらん

紅 林葉漸紅

匡房

〇三 しくれするいは田のをの、柞原あさなくに色かはりけり



落葉水紅 顕季(四才)

四六 小倉山みねのあらしの吹からにとなせの瀧ぞ紅葉しにける

(四七) 白薄 暁月白 藤実方陸奥守

四八 雪かとおきてみつればあさはらけ色わかたき秋の月哉

遠山霞薄 國基

四九 春ふかく又かすみせは故郷のとをちの山をほのみましやは

浅 紅葉猶浅後 通俊

五〇 いかなれは船木の山の紅葉はの秋はすくれとこかれさるらん

深 深山花 関白

五一 嶺つ、きにはふ桜を尋ぬしるへにていとてしらぬ山路にかゝりぬる哉

深山桜 俊頼

五二 山桜たにふところにほふ所に木かくれば風よそよめてひまもとむなり(四六ウ)

深山落花 仲實

五三 みとりのこりなく花ちりにけり莓(つづ)むしろ青根かみねの雪のむら消

深山花残 基俊

五四 いはねふみかさなる山の桜はなわれをまつとや散のこるらん

花色匂春深 俊頼

⑧ かそふれは春も梢に成にけり花とともにや散まかふらん

深山落葉 俊頼

⑨ 日くるれとあふ人もなしまさきちるみねはあらしのをとはかりして

惜春夜深 俊綱朝臣

⑩ つきにける今夜はかりの春のよの有明の月も傾にけり

深夜郭公 經信卿

⑪ さよふけてくらふの山の時鳥ゆくゑも知らず鳴わたるなり

同 為仲朝臣

⑫ おしむよのあけやしぬらんと思よりかねて恋しき春にも有哉

夜深見月 仲実

⑬ かけきよき夜わたる月のさえゆくをまたそれならてたれおしむらん

草花露深 俊頼 (芭才)

⑭ あたしの、はきの末こそ秋風にこぼる、露や玉河の水

山路露深 源師俊卿 中納言

⑮ 夕露にあさのさ衣そほちつ、冬木こりをく小野の里人

夜深聞鴈 匡房

⑯ よを寒み伊勢のはまおき分行は衣かりかねきこゆ成哉

夜深聞鹿 俊頼

⑰ 木のはちる嶺の風に夢覚て涙もよほす鹿の聲哉

秋深夜長 行宗卿

七夕の夜も長月にあひみせは猶むつことやつきせさらまし

野月露深 定家

おきあかす野へのかりほの袖の露をのかすみかと月そさえ行」(四七ウ)

山深紅葉残 源時綱

人もみぬ深山かくれの紅葉はは風もやしらぬちらてのこれる

深山紅葉金 經信

山もりよをの、音たかくひ、く也嶺の紅葉をよきてきらせよ

深山霰 匡房

はしたかのしらふに色やまさるらんとかへる山に霰ふるらん

雪白歳深 俊頼

山さとはつもれる雪のふかさにや暮行としのほとをしるらん

底 松老澗底後 白川院御製

万代のあきをもしらて過ぎたる葉かへぬ谷の岩根松哉

澗底花 俊頼」(四八オ)

子もち山谷ふところにおひたちて木、のはく、み花をこそみれ

澗底月 同

てる月の旅ねのとこやしもとゆふかつらき山のたに川の水

風底萩聲 同

荻のはの軒のあまりにをとつれて人の心をかきみたるらん

流 月浮流水 隆源

いはま行水にしからみかけね共あやしく月のうきて流ぬ

落葉満流 家經

たかせ舟しふく斗に紅葉、のなかれてきたる大井河哉

不流 水氷不流 良 正家

むすひあけし水は氷てなかれねと影みることとはをとらさりけり」(奥ウ)

洲 霜鶴立洲河原院 哥合 無名

あしたつのたてるなきさの川なみにちよをかそへてをくや有らん

同 惠慶法師号幡磨 講師

影みえて汀にたてる露はみなうへしたちかをおもふなるへし

岸 池岸柳金 雅兼卿

風ふけは波のあやをる池水にいとひきそふる岸の青柳

池岸藤花 仲正

⑫松かせにみつのしら玉ふきかけてひかりをそふる池の藤なみ

。岸菊久句 為政

緑なる松のやちよをあらそへはみきはに咲るしら菊の花

林 林近聞鶯聲 無名

くれ竹のしけき宿には鶯の聲をひまなく聞そうれしき

月漏林間 藤盛房〔四才〕

二 わか宿は小野、くるすのかくれにてもりくる月の朧成哉

一葉散林 範永

三 紅葉せん木、の梢はおほかれと一葉もちるはおしき也けり

同 俊網〔マツ〕

三 山かつのたつらのさとのをくるすのかきをしりても散一葉哉

同 經衡

五 一葉たにちるはおしきに紅葉するもりの梢に風や吹らん

良道イ 義孝 伊勢前司

五 あたり野やまゆみも色やつきぬらんなみ木のみやは梢うちちる

兼孝イ 良暹

五 柞原色つく枝をあやにくに一葉なれとも先はちりける〔四九ウ〕

叢 藜中夜虫 能宣

五 君かきく籬の草のす、虫はちよの秋にも聲な絶せそ

虫鳴叢 河原院 無名

五 秋の野の草はの露にそほちつ、鳴虫の音に我もとらす

村 遠村早苗 顕季

五 さと遠み山田のさなへひきつれていそきてみゆる田子のけしきか

遠村煙 打聞 藤頼成

五〇 遠近のけふり斗もみゆる哉なに人すめる渡り成らん

遠村花歌 定家

三一 誰かすむ野原の末の夕霞立まとはせる花の木下

路徑 行路落花 通俊卿〔五〇才〕

三二 散まかふ花ゆへけふは暮ぬれはあさたつ道もかひなかりけり

行路恋 定家

三三 露（八）のをくゐての下帯さはかりもむすはぬ野への草のゆかりに

行路螢火 関白

三四 か、りひにまかふ螢をしるへにて此明暮に舟出すらしも

行路時鳥 花園左大臣

三五 たとり行つねしかの山路をうれしくも我にかたらふ時鳥かな

行路秋花 三条大納言

三六 しをりしてゆく人もかな秋萩の花のみたれに道もしられす

山路落花 橘成元

三七 桜花道みえぬまで成にけりいか、はすへきしかの山こえ〔五〇ウ〕

山路暁月 範永

三八 有明の月もし水にやとりけり今夜は越しあふさかの関

山路時鳥 関白

三九 尋入山路をすて、ほと、きす聲するかたへ行心かな

山路月夜 定家

善三 山風は月のさ衣はらへともをもらぬ雪は木のはこそふれ

善三 山路時鳥 太政大臣

善三 山木をたてそをきつる時鳥心すむとや人のみるらん

同座 頸輔 季イ

善三 朝夕の風をもまたすいかにしてなきわたるらん山ほと、きす

海路時鳥 無名 (五二才)

善三 高妙の松になきけり時鳥この湊にそ舟はと、めん

関路時鳥 俊頼

善三 ときしまれなきあふさかの杖か枝に山時鳥関かたむ也

(10) 関路千鳥金 源兼昌入道 大官少進

善三 あはち鳴かよふ千鳥の鳴聲にいくよね覚ぬすまの関守

山路暁月 範水

⑬ 有明の月もし水にやとりけりこよひは越しあふ坂のせき

野徑躑躅 行宗

善三 心をはのへのつ、しにと、めをきて我身はかりや宿へ帰らん

野徑月 関白

善三 やへむくらしけみのをの、古道にやとるもおしくみゆる月哉

野徑秋風 西行

善 末葉吹風は野もせにわたる共あらくは分し萩の下露」(五二ウ)

海路月 顯輔

善 有明の月の出しほに舟てしてあかしのうらそ過る空なき

行路初雪 実行卿

善 よなくの旅ねのところに風さえて初雪ふれるさやの中山

行路秋花 顯季卿

善 (1) まの、萩原咲にけり行かふ人の袖にはふまで

處々 處々尋花 白河院御製

善 春くれば花の匂にさそはれていたらぬ里のなかりける哉

六条右大臣

善 よしの山谷かくれなる花ならてけふは尋ぬ所あらしな

匡房」(五二オ)

善 桜咲四方の白雲一かたにあし毛の駒の宿も定す

處々尋花 以下同座 公実

善 嶺こえていくえ手折つ山桜いつれもあかぬ花のほひに

同 通俊

善 桜花たつぬとしつ、日はくれぬいつれの宿も過かてにして

卯花處々 顯季

善 河上にむらく咲る卯の花はをく白波の立かとそみる



寒蘆處々

邦道上総前司  
よみ人しらすイ

風寒み霜かれわたるあしのはのたえくみゆる難波瀉哉

庭 庭移秋花後 京極前太政大臣

我宿に秋の野へをほうつせりと花みにゆかん人にみせはや(五三ウ)

野花移庭 範永

心ありて露やをくらん常野ヘイよりも匂ひまさされる秋萩はきはきにけりイの花

庭紅葉裏 定家

守山も木の下までそしくなる我か袖のこせ嶺の紅葉、

庭上落花裏 同

花の色ときえすはけさもみゆ斗梢にしはし春の残つゞまらて

庭上冬菊裏 熊野 新宮御會 同

霜をかぬ南のうみのはまひさし久しく残にはみイる秋の白きく

庭上花 同

月草の色ならなくにうつしうへてあたにうつろふ花桜哉

庭樹陰葉ハツマ 白河院御製(五三オ)

おしなへて梢葉ひろに成ぬれば松のみとりもわかれざりけり

同 匡房

庭のおもは月もらぬまで成にけり梢に夏の日数つもりて

砌 梅花薰砌 顕輔

あさからぬ匂のみかは梅の花しつえは宿のかさしなりけり

砌下栽竹

新院御製

⑭ 軒近く植そたてたるかは竹はおなしなかれのすめはなりけり

盧橘薫砌

顯季

橘のこすのまとをに匂ふ哉たかふる袖とおもひける哉

隣 卯花隔隣

俊頼

卯の花のかきねはかりそもろ共にかよふ心はへたてさ<sup>なけれとイ</sup>りける

隣家盧橘

新院御製

⑮ かきこしにこち吹かせのほひより花たちはなをよそにしるかな

隣家盧橘

源師光

我宿にうへぬ斗そ橘のほひは垣もへたてさりけり」(三ウ)

風傳隣花

定成

桜ちる隣(12)いとふ春風は花なき宿そうれしかりける

隣家水鶏

行宗

宿ちかき水鶏の音におとろきて枕に夢をのこしつる哉

山家 山家更衣

成助

卯のはなのかきねをみてや山かつのあさの衣をうすくなすらん

山家梅花 成助

⑯ 梅花垣ねに匂ふ山さとはゆきかふ人の心をそみる

山家卯花 通宗俊イ

⑰ 跡たえてとふ人もなき山里に我のみみよとさける卯の花

山家水鶏 輔弘

⑱ やへしけるむくらの宿のいふせさにさらすや何をたゝく水鶏そ

山家暁螢蟲 俊頼

⑲ あしのやのひまほのくとしらむまでもえあかしても行螢哉

山家秋風 皇太后(マツ)宮越後

⑳ 山さとの賤の松垣ひまをあらみいたくなふきそ木からしのかせ

山家霧後拾 蟲 經信母(五才)

㉑ 明ぬるか河せの雫のたえまより遠かた人の袖のみゆるは

山家秋暁 頼家

㉒ くれゆけはあさちかはらの虫の音もおのへのしかも聲たてつなり

山家寒草蟲 西行

㉓ かきこめしすその、す、き霜かれてさひしさまさる柴の庵哉

山家時雨

永胤法師

⑳ 神無月ふかくなりゆく梢より時雨てわたるみ山へのさと

山家春意

俊宗

㉑ みわたせは野沢のあしもつのくみぬ今は門田に種まかせてん

山家冬夜

俊頼

㉒ ひとりぬるやとはふゝきにうつもれて岩のかけ道跡たえにけり

山家鶯

俊頼朝臣

㉓ 雪きえぬ谷かくれなる鶯のなにをしるへに春を知らん

山家藪

俊綱

㉔ とふ人もなきあしふきのわかやとはふるあられさへをとせさりけり

山家瞿麦

匡房

㉕ 色もかもいつとかわかんわか宿の垣ねにさける撫子のはな

山家雪

國房

㉖ さひしさをいかにせよとてをかへなるならのはしたりみゆきふるらん

山家紅葉

俊頼朝臣

㉗ 山里は柴のかこひのひまをあらみ入くる物は木のは也けり

山家待春

良暹

②④ つくくと春をこそまで雪のうへにあらしくしからきのと

「(五ウ)

山家客来

成助

②⑤ 時雨する山ちふりはへくる人は紅葉にあかぬこゝろなるらん

山家旅宿

經信

②⑥ 旅ねするやとは深山にとちられてまさきのかつらくる人もなし

野亭 夜宿野亭後

叡覚

②⑦ こよひこそ鹿の音ちかくきこゆなれやかて垣ねは秋の、なれは

野亭聞鹿

俊頼

②⑧ さをしかのなく音は野へにきこゆれと涙は床の物にそ有ける

雨後野草

同

②⑨ 此さとも夕立しけり浅茅生に露のすからぬ草のはもなし

夏野草

西行

②⑩ みまぐさに原のすゝきをしかふとて臥とあけぬと鹿思ふらん

建仁元年八月十五夜月十首哥合に野月

野月

露涼

藤原秀能

②⑪ おきはらや露を秋風吹からにたもとをならす有明の月」(五オ)

(27) 萩原とよみて野字は侍る歟云々

(15) 田家 田家秋興

匡房

秋くれはあさけの風の手を寒み山田のひまをまかせてそきく

田家秋風後

頼家宗卿イ

宿ちかき山田のひたに手もかけて吹秋風にまかせてそきく

田家秋雨

太政大臣実行

かりしほの門田の稲のくつるまであま、待(マ)をる心もとなさ

田家老翁金

基長卿

ますらおは山田の庵に老にけり今いく秋にあはんとすらん

田家月裏

定家

なかめつく(ツ)とはれす久に秋の田のほのうへてらす月のいくよを(五ウ)

田家

同

民(五)の戸のあまつ空なる秋の日にはすや

をしねの数も

しられす

(空白) (五オ)

(白紙) (五ウ)

- (1) 傍書「れぬイ」、「こほる、」の傍書であるべきであるが、次の歌の「むすほ、るらん」の傍書であるかのような位置。
- (2) 底本、「篠」字、竹冠に「条」の字。
- (3) 「は(盤)」字、「そ」のようにもみえる。
- (4) 底本、「火」扁に「虫」のような文字。
- (5) 「鮮」字、「奥」偏に「単」のような文字。
- (6) この書き入れ歌は、書眉ではなく、本文の行間に、題・歌・作者の順で二行書き。
- (7) 「あしたつ□□□む」とよめる文字を削除した上に「菰はみなうへし」と書く。
- (8) 「ゐ」字、「打」のようにもみえる文字。
- (9) 「樵イ」の異文注記、位置不審。底本では、  
舞「山風は月のさ衣……」  
 山路時鳥」  
 のような位置関係にある。
- (10) 五三五・五三六・五三七歌、題右肩の「二」「五」「六」は、歌順の異同を示す。
- (11) 同歌、「日本歌学大系」(底本、橋長頼本)では、「霧はれぬをの、萩原…」、「丹鶴叢書」では「霧はれぬまの、はき原…」とあり、更に「花の、小はき同」とある。
- (12) 底本この「鶏」字、旁が「佳」。
- (13) ⑤歌の下に⑥歌を記す。
- (14) 改行底本のまま。
- (15) 底本、「田家」と同行に「萩原とよみて…」とあり、「田家秋興」は改行する。
- (16) この歌のみ、改行を底本通りとした。志香須賀文庫蔵日野資時本が全く同様の散らし書き風に改行する。